

楠本端山の世界―『端山先生遺書』 詩 訳注(その五)

あらし 本『研究報告』第三十八号掲載分に引き続き、幕末維新期の儒学者である楠本端山の漢詩に訳注する。本稿分も端山および宋明儒学者一般の漢詩の特徴がよくわかる作品である。中国の文学や思想を背景としてそれらが解釈されなければならないことも、これまで紹介した作品と同様である。本稿では二つの作品に訳注した。どちらも政務から離れた生活を題材としたものである。このような場合、宋明儒学者の詩は内容が類型化しやすい。すなわち花鳥風月と自分とのかかわりをうたう。静かに落ち着いて暮らしている自画像を描く。当然、言語表現もそれらに見合ったものとなり、一見のどかな光景がそこに現出されている。ただし、そのどかさには単に一時的な心境ではない。儒学者としての志や在るべき人生そのものの表出という意味を持っている。すなわち、元来は政治家でありながら政治世界に浮沈するのをよしとしない矛盾とも言える生き方が提示されているのである。儒学者はさまざまな人物や思想、言語と交渉してきた。彼らの詩にみられる言語空間は、長い歴史の間に練りあげられてきたのである。詳しくは【注】に挙げた資料を見ていただきたい。

キーワード 「無事、従容、閑適、養性情、高眠」

一 この訳注(その五)に関わる端山年譜

一八五七年(安政四年 丁巳) 三十歳

家で療養。正月、家廟の建築を計画し、冬に完成する。二月、

松崎 賜・吉田仁士¹⁾・林 浩俊²⁾

家塾「困学寮」をつくる。

※『楠本端山碩水全集』³⁾所収の自著年譜をもとにした。

二 訳注

①(四十二) 春興

【原文】

雨展遺編晴曳箒、閑来無事儘従容。点塵不到春温足、一径花深苔欲封。

【書き下し文】

雨に遺編を展べ晴れては箒を曳く、閑来無事^{こころごと}儘く従容たり。点塵^{ちてん}到らず春温^{はるぬる}足り、一径花深く苔封せんと欲す。

【口語訳】

雨が降れば古人の遺した書物を広げ、晴れば杖をついて外へ出かける。閑かでも何にもとらわれず落ち着いて、いつも気ままにゆつたりと過ごしている。俗世の汚れもここには至らず、春が満ちあふれていて温かい。庭の小道には花が重なり合って咲き、苔も広がろうとしている。

【解説】

この詩は全般的には自然と一体になったのびやかな生活について描いている。そうした生活が、古人の書を読む、心が乱れないなどといった儒学者の学問、修養と緊密に結合し、詩として表現されると一つの叙情

をかもし出すのである。思想的なことを表現しても、その詩は単なる理屈や教訓に落ちていない。松浦友久氏によると、『説理のための説理』なら、散文で読めばいいようなもので、実際は、ほとんど人に感動を与えません。しかし、『抒情』の要素と、あるいは『叙景・叙事』の要素と絡まりながら、きちんと『理』が説かれた場合は、単なる抒情のための抒情、さらには叙景のための叙景、では表し得ない、独特の『説理的抒情』というものが生まれてくるのだらうと考えられます。④、また、「このように『詩的説理』というものの持つている非常に大きな可能性といましようか、それを敏感に感じとる人も、それほどでない人も、むしろいるわけですけども、陶淵明、それから、それを継いだ白居易、さらにその両者を継いだ蘇東坡、などという人々は、やはりそういう点に対して非常に敏感な詩人だったと思われまます。そして、そうした説理への敏感さが、彼らの作品を成功させている大きな原因の一つになっているのではないか、と考えています。」⑤。端山の詩についても、まさに同じことが言える。思想という素材があるからこそ、それらが情景と一体化して味わいある作品となつていているわけである。

【注】

○遺編…古人の遺した儒学関係の著述。 ○閑来…することもなくて。

来は助辞であろう。李白の「行路難三首」其の二に「閑来釣を垂る碧溪の上、忽ち復た舟に乗る夢日の辺。」とある。また、白居易の「整屋庁前の双松に寄題す」に「閑来一たび惆悵す、恰も交親に別るるに似たり。」とある。同じく「元九に寄す」に「身は近密の為に拘せられ、心は名檢の為に縛せらる。月の夜と花の時と、杯酒の楽しみに逢うこと少し。唯だ元夫子有るのみ、閑来一酌を同じくす。」とある。同じく「夜に西武丘寺に遊ぶ八韻」に「西寺丘を厭わず、閑来即ち一たび過ぐ。」とある。この語を使つた程明道の詩「秋日偶成」を本『研究報告』にも紹介した⑥。 ○無事…用事がない、暇なこと。思想的には、心をみだす何事もない、変わりもないこと。「無事」の用例としては、『莊子』には「天は其れ運れるか、地は其れ処れるか、日月は其れ所を争うか。孰れか是れを主張し、孰れか是れを維綱する。孰れか无事に居り、推して

是れを行う。…孰れか无事に居り、淫楽して是れを勧むる。…孰れか无事に居りて是れを披拂する。」(天運篇)、「其の肝胆を忘れ、其の耳目を遺れ、茫然として塵垢の外に彷徨し、无事の業に逍遙す。」(達生篇)とあり、郭象注にも「無事に居りて以て事を待てば、事は斯ち得たり。」(徐无鬼篇注)などあるように、それは天地宇宙や政治のあり方、主体の超越性などを表現する語であった。仏教ではさらに具体的な色彩を帯びてくる。ここでは禅宗の文献から「無事」の用例をあげると、黄蘗『伝心法要』には「道人は是れ無事の人なり。実に許般の心無し、亦た道理の説く可き無し、事無し、散じ去れ。」⑦とある。黄蘗門下で、白居易とほぼ同時に活躍した臨済の語録『臨済録』にも「道流、山僧が見処に約せば、釈迦と別ならず。今日多般の用処、什麼をか欠少す。六道の神光未だ曾て間歇せず。若し能く是の如く見得せば、祇だ是れ一生無事の人なり。」(示衆)⑧、「無事はれ貴人、但だ造作すること莫かれ、祇だ是れ平常なれ。你、外に向つて傍家に求過して脚手を覓めんと擬す。錯り了れり。」(同)⑨、「道流、仏法は用功の処無し、祇だ是れ平常無事。廁屎送尿、著衣喫飯、困れ来たれば即ち臥す。愚人は我れを笑うも、智は乃ち焉を知る。古人云く、外に向つて工夫を作すは、総べて是れ痴頭の漢なり、と。你且く随処に主と作れば、立処皆な真なり。境来たるも回換すること得ず。縦い従来の習気、五無間の業有るも、自ら解脱の大海と為る。」(同)⑩、「道流、大丈夫児は今日方に知る、本来無事なることを。祇だ你が信不及なるが為に、念念馳求して、頭を捨てて頭を覓め、自ら歇むこと能わず。」(同)⑪などある。「無事」は、意味するところの異同はともないながらも中国文化の内実を表現し続けた重要な語である。特に「平常」などの語と結びついて使われることに注意が必要である。「無事」は単なる心境やイメージではない。現実世界の中でもそれは実現可能なのであると彼らは言う。宋学になると今度は、仏教に対して儒教の意義を宣揚しようとして、「無事」も儒教的修養の路線にとらえなおされる。和刻本『二程全書』卷十九・遺書・十一aに「問う。『敬は還つて意を用うるや否や。』と。曰わく、『其の始めは安んぞ意を用いざることを得ん。若し能く意を用いざれば、却

つて是れ都て無事なり。』と。同じく十六bに「顔子、之を仰げば彌いよ堅しと言は、此れは是れ聖人の高遠なること実に及ぶべからず、堅固なること実に入るべからずと言は非ざるなり。此れ只だ是れ却つて無事なることを譬喩するなり。」とある。宋明儒学では、「無事」は身心の修養のはてに至り着く、ある具体的な生き方なのである。さらに明代には例えば、端山も傾倒した高忠憲に「困学記」（『高子遺書』卷三）なる文章があり、それには静坐の修養により彼が行きついた根源的な体験が細部にわたって記録、描写されている。「常に路に在ること二月、幸いに人事無くして山水清美なり。主僕相依り、寂寂静静、晩間には酒を命ずること数行。舟を青山に停し、碧澗を徘徊し、時に磐石に坐す。溪声、鳥韻、茂樹、修篁、種々心を悦ばしむるも心は境に著せず。汀州を過ぎ陸行し一旅舎に至る。舎に小楼有り。前は山に対し後は澗に臨む。楼に登れば甚だ楽し。手に二程の書を持つ。偶たま見れば明道先生曰く、『百官万務、兵革百万の衆きも、水を飲み脰を曲ぐるも、楽しみ其の中に在り。万変は俱に人に在り、其の実は一事無し。』と。猛省して曰く、『原来此くの如し、実は一事無きなり。』と。一念の纏綿たる、斬然として遂に絶ち、忽ち百觔の担子、頓爾として地に落つるが如し。又た電光一闪、透体通明し、遂に大化と融合して際無きが如く、更に天人内外の隔て無し。此に至りて六合は皆な心、腔子は是れ其の区宇、方寸は亦た其の本位なるを見る。神にして之れを明らかにするも、総て方に言うべき所無きなり。平日深く学者張皇して悟りを説くを鄙しむ。此の時は只だ平常なるを看作す。自ら知る、此に従れば方に工夫を下すに好きのみと。』とある。この文中の程明道の言葉は、和刻本『二程全集』卷七・遺書・四aにある。「樂しみ其の中に在り」は『論語』述而篇に「子曰わく、『疏食を飯い水を飲み、脰を曲げて之れを枕とす。樂しみ亦た其の中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我れに於て浮雲の如し。』とあるのをふまえる。高忠憲は朱子学を厳格に信奉するが、彼の書簡類を見るに僧侶との交流はあったことがわかる。儒教と仏教はその内実は異なるものの、中国においては光と影のような関係にあることは事実である。これらに老莊思想を交じえ、三者を素材として、各人が各人の「無

事」をつくりあげてきたわけである。詩賦の用例としては、張衡の「東京賦」（『文選』卷三）に「登りて封じ降りて禪れば則ち徳を黄軒に齊しくし、無為を為し無事を事とす。」とある。また、潘岳の「懷県に左りて作る二首」其の二（『文選』卷二十六）に「城に登りて郊甸を望み、目を歴朝の寺に遊ばしむ。小国に民の務め寡し、終日寂として無事なり。」とある。また、盧照鄰の「時の春に于てや、慨然として江湖の思い有り、寄せて柳九隴に贈る」に「琴を提ぐこと一万里、書を負うこと三十年。晨に偃蹇たる樹に攀り、暮に清冷たる泉に宿る。翔禽は我が側に鳴き、旅獸は我が前に過る。無人且つ無事、独り酌み還た独り眠る。遙かに聞く彭沢の宰、武城の弦を高弄し、形骸は文墨に寄せ、意気は神仙に託するを。我に壺中の要有り、題して物外篇と為す。」とある。また、張九齡の「晨に郡舎の林下に出ず」に「晨に興きて北林を歩み、蕭散して一たび襟を開く。復た見る林上の月、娟娟として猶お未だ沈まざるを。片雲は自ら孤遠にして、叢篠は亦た情深し。無事なること由来貴ぶ、方に知る物外の心。」とある。また、孟浩然の「白雲先生王迴訪せらる」に「聞歸して日に無事、雲臥して昼起きず。」とある。また、王維の「晦日大理韋卿の城南の別業に遊ぶ、四声、依て次す、各おの六韻を用う」其の一に「世と澹として無事、自然江海の人。」とある。また、李白の「宣城の宇太守に贈り兼ねて崔侍御に呈す」に「此を過りて一事無く、静かに談ず秋水の篇。」とある。「秋水の篇」とは『莊子』外篇の篇名である。また、高適の「韋司戸の山亭院に宴す」に「人は幽にして靈山を想い、意は愜いて遠水を憐れむ。静に習いて務めて適を為し、居る所は還た復た爾り。琴を横たえて了に無事、釣を垂れて応に以うこと有り。高館何ぞ沈沈たる、颯然として涼風起く。」とある。同じく、「睢陽路太守の贈らるるに奉酬するの作」に「清浄にして能く無事、優游として即ち詩を賦す。」とある。また、韋応物の「閒居して端及び重陽に寄す」に「閒居寥落として高興を生ず、無事風塵独り帰らず。」、同じく「蕭河南に贈る」に「琴に対して一事無し、新興復た何如。」、同じく「起度律師と東齋院に同居す」に「逍遙として一事無く、松風は南軒に入る。」、同じく「呉舎人の早春に西亭に帰沐し志を言うに和す」に「詩を賦して

無事を楽しみ、帯を解きて南扉に偃す。」、同じく「晩に澧川に帰る」に「意に適うは無事に在り、手を携えて秋田を望む。」、同じく「閑居して諸弟に寄す」に「尽日高齋に一事無く、芭蕉葉上独り詩を題す。」とある。また、白居易の「杓直に贈る」に「外は世間の法に順い、内は区中の縁を脱す。進みて朝市を厭わず、退きて人寰を恋せず。吾れ此の心を得て自り、足を投じて安んぜざる無し。体は導引に非ずして適い、意は江湖無くして閑なり。興有りて或いは酒を飲み、無事にして多く関を掩う。寂靜にして夜深くして坐し、安穩にして日高くして眠る。」とある。「体は導引に非ずして適い、意は江湖無くして閑なり。」は『莊子』刻意篇に「若し夫れ意を刻せずして高く、仁義無くして脩まり、功名無くして治まり、江海無くして閑に、導引せずして寿なるは忘れざる無きなり、有せざる無きなり。澹然無極にして、衆美之れに従う。此れ天地の道、聖人の徳なり。」とあるのをふまえる。同じく「偶作二首」その一に「無事なれば日月長く、羈せずして天地闊し。身を安んずること処所有り、意に適うこと時節無し。」とある。同じく「虚白堂」に「虚白堂前に衙より退きて後、更に一事として中心に到る無し。牀を移し日に就きて簷間に臥し、臥して閑詩を詠じ側ら琴を枕にす。」とある。同じく、「新昌に閑居して楊郎中兄弟を招く」に「但だ双松の砌下に当る有り、更に一事として心中に到る無し。」とある。同じく「夏日に独直して蕭侍御に寄す」に「澹然として他念無し、虚静は是れ吾が師なり。形は有事に委ねて牽かれ、心は無事と期す。」とある。同じく「新庭の樹を遊び因りて懐う所を詠す」に「中臆は一に以て曠く、外累は都て遺るが若し。地は貴くして身は寛らず、意は閑にして来り随う。情性聊か自適して、山中に在る時の如し。但だ松と竹とに對し、吟詠して偶たま詩を成す。下に無事の人有り、竟日此に幽尋す。・・・始めて知る真隱の者、必ずしも山林に在らざるを。」とある。同じく「錢員外の糧を絶てる僧巨川に題するに同ず」に「三十年来坐して山に對し、唯だ無事なるを將て人間に化す。」とある。同じく「閑居」に「且従り直だ昏に至るまで、身心一に無事なり。心足れば即ち富為り、身閑なれば乃ち當に貴し。富貴は此の中に在り、何ぞ必ずしも高位に居らん。」とある。

「富貴は此の中に在り」は『論語』述而篇の語句をふまえる（前頁に既出）。同じく「閑居」に「深く竹間の扉を閉じ、静かに松下の地を掃う。独り嘯く晚風の前、何人か此の意を知らん。山を看て冬日に坐し、帙を枕とし時を移して睡る。誰か能く我に従いて遊び、君の心をして無事ならしむる。」とある。同じく「関を閉ず」に「我が心は世を忘るること久しく、世も亦た我を干さず。遂に一たび無事を成し、因りて長く関を掩うを得たり。」とある。同じく「自ら間行す何ぞ遅き」に「酒は醒めたり夜深き後、睡は足りたり日高き時。眼底に一も事無し、心中に百も知らず。」とある。同じく「新酒を嘗るに和す」に「睡酣わにして語笑せず、真とに寝たれば夢寐する無し。殆ど形骸を忘れんと欲す、詎ぞ天地に属するを知らん。醒余に和なること未だ散ぜず、起坐して澹として無事なり。」とある。同じく「日長し」に「身外何ぞ言うに足らん、人間本より無事なり。」とある。同じく「船の夜に琴を撥く」に「鳥は棲みて魚は動かず、月照りて夜の江深し。身外都て無事、舟中只だ琴有り。七弦は益友為り、両耳は是れ知音なり。心静かなれば即ち声淡く、其の間古今無し。」とある。同じく「池上に小舟有り」に「身は閑にして心は無事なり、白日は我が為に長ず。我若し未だ世を忘れずんば、閑なりと雖も心は亦た忙ならん。」とある。同じく「冬日早とに起きて閑詠す」に「晨に起きて爐香に對し、道經両卷を尋ぬ。晩に坐して琴塵を払い、秋思一遍を弾ず。此の外更に無事なり、尊を開きて時に自ら勤む。何ぞ必ずしも東風の来たるのみならん、一杯に春は面に上る。」とある。同じく「楽む所を詠す」に「体中幸いに疾無く、臥して清風の吹くに任ず。心中又た無事、坐して白日の移るに任ず。或いは書一篇を開き、或いは酒一卮を引く。但だ今日の如きを得ば、終身厭う時無けん。」とある。同じく「病中に宴坐す」に「竟日惰として無事、居る所閑にして且つ深し。外は支離の体に安んじ、中に希夷の心を養う。」とある。「支離」は『莊子』人間世篇に出る語。「希夷」は『老子』第十四章の「之れを視れども見えず、名づけて夷と曰い、之れを聴けども聞こえず、名づけて希と曰う。」をふまえる。同じく「逸老（莊子に云う、我を勞するに生を以てし、我を逸するに老を以てし、我を息わしうるに死を以て

するなりと。)に「胸中に一事無く、浩気は襟抱に凝る。飄として雲の風に信するが若く、魚の藻に在るよりも樂し。」とある。同じく「朱道士に贈る」に「尽日の窓間更に無事なり、唯だ焼く一炷の降真香。」とある。同じく「自遠禪師、遠は無事を以て仏事と為す」に「出家して自ら来、長えに自在なり、身に縁るは一衲一繩牀。人をして即心無事、一たび相い逢う毎に是れ道場なるを見令む。」とある。同じく「僧に贈る五首」より「睡覺の偶吟」に「官初めて罷めて後帰り来る夜、天明けんと欲するの前に睡り覚むる時。起坐して思量するに更に無事なり、身心安樂なること復た誰か知らん。」とある。白居易は老荘思想のみならず仏教にも深く傾倒した。すなわち「早年に身代を以て、直ちに赴く逍遙の篇。近歳に心地を將て、廻つて向う南宗の禪。」(「杓直に贈る」)、あるいは「儒教は礼法を重んじ、道家は神氣を養う。礼を重んずれば滋彰足り、神を養えば避忌多し。禪定を学ぶに如かず、中に甚深の味有り。」(「非を知るに和す」)などと言うように、仏教への関心には多大なものがあった。白居易の生きた当時、寺院を遊覧することは慣行となっていた(12)。さらに、森三樹三郎氏によると、六祖恵能の系統である南宗禪は表向き座禪を否定したことになっているが実際には修行として試みていたのではないかという(13)。事実、白居易も座禪を修行している。例えば「達哉樂天行」などには「座禪」の語が見える。こうした文化的、思想的背景の中で、白居易も「坐」して「禪」定することを修養の一貫として日常化していたのである。まず静かにすわる、ということが生活の一部となって定着していたわけである。なお、白居易と仏教、老荘思想との関係については例えば花房英樹氏の『白居易』(14)を参照されたい。ここでは白居易は「文学的人間」とされ、思想それぞれの差異にはおおらかであったといわれている。また、柳宗元の「雨後に曉行して独り愚溪の北池に至る」に「宿雲は洲渚に散じ、暁日は村塢に明らかなり。高樹は清池に臨み、風は驚く夜来の雨。予が心は適に無事なり、遇たま此に賓主と成る。」とある。○従容:ゆつたりと落ち着いたさま。くつろぐさま。張華の「何劭に答う二首」其の一に「従容として余日を養い、樂しみを桑榆に取る。」とある。同じく「鷓鴣の賦」(『文選』卷

十三)に「幸を今日に蒙ると雖も、未だ疇昔の従容たるに若かず。」とある。また、孫綽の「天台山に遊ぶの賦」(『文選』卷十一)に「心目の寥朗たるを恣にし、緩歩の従容たるに任す。」とある。また、王褒の「洞簫の賦」(『文選』卷十七)に「氣旁遊して以て飛射し、馳せて散渙として以て還遯たり。趣ること従容として其れ勿述たり、驚すること合遯として以て詭譎たり。・・・頼りて聖化を蒙り、従容として道に中り、樂しみて淫せず。」とある。「樂しみて淫せず」は『論語』八佾篇に「子曰わく、『閔睢は樂しみて淫せず、哀しみて傷らず。』と。」とあるのをふまえる。同じく「四子講徳論」(『文選』卷五十一)に「文学曰く、君子は動作に応有り、従容として度を得。」とある。また、傅毅の「舞の賦」(『文選』卷十七)に「形態は和らぎて神意協う、従容として忘を得て却されず。」とある。また、任昉の「王文憲集の序」(『文選』卷四十六)に「言を立つれば必ず雅にして、未だ嘗て其の長とする所を顕さず。論を持すれば従容として、未だ嘗て人の短とする所を言はず。」とある。また、夏侯湛の「東方朔画贊」(『文選』卷四十七)に「下位に栖遅し、聊か以て従容す。」とある。また、李康の「運命論」(『文選』卷五十三)に「正道に従容するも、其の末を維ぐ能はず。」とある。また、韋応物の「柳州韓司戸郎中に寄す」に「達識と昧機と、智は殊にして跡は同じく静なり。焉に於いて手を携うることを得、屢しば賞す清夜景。瀟灑として高詠に陪い、従容として華省を羨む。」とある。また、白居易の「鄭秘書徵君の石溝溪の隠居に題贈す」に「鄭君は自然を得、虚白心胸に生ず。俛仰して三命を受け、従容として九重を辞す。」とある。同じく「道宗上人に題す十韻」に「従容として語言を恣にし、縹緲として文字を離る。」とある。同じく「鏡を覽て老を喜ぶ」に「爾輩ら且く安坐して、従容として我が詞を聴け。生は恋うるに足らざるが若し、老も亦た何ぞ悲むに足らん。」とある。同じく「夢得の冬日晨興に和す」に「帳下に従容として起てば、窓間に矐矐として明かなり。」とある。同じく「奈何というべき無き歌」に「何ぞ道と逍遙として、委化従容にして、心を縦にし志を放ち、洩洩融融たらざる。」とある。同じく「秋の光に問う」に「淡交は唯だ水に對い、老伴は鶴に如くは無し。

自ら適して頗る從容たり、旁らに観るに誠に溥落なり。身心転た恬泰にして、煙景彌いよ淡泊なり。」とある。同じく「病仮の中に龐少尹の魚酒を携えて相過れり」に「老に相催されて白首なりと雖も、春と分つこと無くして未だ甘心せず。間に茶椀を停めて從容として語り、酔いて花枝を把りて取次に吟ず。」とある。同じく「郭道士を尋ねて遇わず」に「參同契の中のことを問わんと欲し、更に期す何れの日か從容することを得ん。」とある。

○閑来無事儘從容：前述の程明道の「秋日偶成」に「閑来事として從容たらざる無し、睡覺東窓日己に紅なり。」とある。

○春温：春の暖かなこと。○一徑：張九齡の「南嶽に登り、事畢わりて司馬道士に謁す」に「命を將て靈嶽に祈り、策を迴して真士に詣る。絶跡に一徑を尋ぬれば、異香は数里に聞こゆ。」とある。また、白居易の「夜に法王寺従り下りて嶽寺に歸す」に「双刹は虚空を夾み、緑雲に一徑通ず。」とある。

○花深：白居易の「柘枝の詞」に「柳闇くして長廊合い、花深くして小院開く。」とある。同じく「採蓮の曲」に「菱の葉は波に繁りて荷は風に颺り、荷花深き処に小船通る。」とある。同じく「靈巖寺」に「聞説らく春來りて更に惆悵なり」と、百花深き処一僧歸る。」とある。

○昔欲封：白居易の「池上の旧亭を葺く」に「池目は夜に淒涼たり、池風は曉に蕭颯たり。池上の冬に入らんと欲し、先ず池上の閣を葺く。暖に向んとして窓戸開き、寒を迎えては簾幕合う。昔は旧き瓦木を封じ、水は新たななる朱蠟を照らす。軟火は深き工爐にして、香醪は小なる瓷榼なり。中に独り宿る翁有り、一灯一榻に對せり。」とある。同じく「石門澗に遊ぶ」に「雲は莓苔の封ずるを覆い、蒼然として覓む処無し。」とある。

② (四十三) 溪山夜雨

【原文】

溪山風已死、雲庄暗簷楹。聊亦欣閑適、薄言養性情。漏移灯影淡、衣冷雨声清。此夜南窓下、高眠夢不驚。

【書き下し文】

溪山風已に死み、雲庄して簷楹暗し。聊か亦た閑適を欣び、薄か言に

性情を養う。漏移りて灯影淡く、衣冷たくして雨声清し。此の夜南窓の下、高眠して夢驚かず。

【口語訳】

谷川に吹く風がやみ、雲が空を覆い軒端も暗くなってきた。しばらく閑かな時をたのしみ、本性を養っている。時が過ぎて灯火も淡くなり、着物は冷え雨音が快く聞こえてくる。今夜は南向きの窓の下で、心を騒がすような夢も見ずにゆっくりと眠るのだ。

【解説】

この作品も①と同じ構造を持つている。宋明儒学者ならではの文脈、すなわち「閑適」から「性情を養う」「高眠」へのつながりがみられるのである。これら二つの語は唐詩までの作品に既に使用されている。ただ、ここではそれらが、儒学者の修養と志を言語化するのにふさわしい関連性を付与されて配置されているのである。これらの詩は単に教養人の高尚な趣味あるいは慰安を表現したものではない。あくまでも儒学者として涵養された人間性を表現しているものである。その結果として叙情味にあふれているのである。

【注】

○簷楹：軒端。柳耆の「陽春の歌」に「旅人語る無く簷楹に坐し、郷を思い土を懐いて志平かなること難し。」とある。また、盧照鄰の「首春に京邑の文士に貽る」に「寂寂として將迎を罷め、門に車馬の声無し。琴を横たえて山水に答え、巻を披きて公卿に問す。忽ち聞く歳云に晏なりと、杖に倚りて簷楹に出ず。」とある。「門に車馬の声無し」は陶淵明「飲酒」其の五をふまえている。また、張九齡の「感遇十二首」其の六に「燕雀は昏旦に感じ、簷楹に匹儔を呼ぶ。」とある。また、孟浩然の「重ねて李少府の贈らるるに酬ゆ」に「疾を養う衡簷の下、由来浩氣真なり。」とある。また、李白の「清溪の主人に宿す」に「簷楹は星斗を掛け、枕席に風水響く。」とある。また、高適の「群公の秋に琴台に登るに同ず」に「燕雀は簷楹に満ち、鴻鵠は扶搖に搏つ。物性は各おの自得し、我が心は漁樵に在り。兀然として還た復た酔い、尚お尊中の瓢

を握る。」とある。この詩の前半は『莊子』逍遙遊篇および郭象注をふまえる。また、韓愈の「曲河駅に食す」に「群鳥庭樹に巢い、乳雀簷楹に飛ぶ。」とある。○閑適：静かにゆつたりとして楽しむ。白居易の「庾侍郎に寄す」に「幽致竟に誰か別たん、間静にして聊か自ら適す。」とある。同じく「閑適」に「禄俸優饒として官卑しからず、就中閑適なるは是れ分司なり。」とある。同じく「皇甫十に問う」に「苦楽心は我に由り、窮通命は他に任ず。坐して張翰の酒を傾け、行きて接輿の歌を唱す。榮盛は傍らに看るに好く、優閒にして自ら適すること多し。知りぬ君能く事を断ず、勝負両つながら如何。」とある。同じく「詠懷」に、「人生は百年の内、疾速なること隙を過ぐるが如し。先ず身の安閑なるに務め、次に心の飲適ならんことに要む。事を得て失うこと有り、物は損して益すること有り。所以に道を見る人は、心を覲じて跡を覲ぜず。」とある。また、元稹の『白氏長慶集』序には、「閑適の詩は遣に長ぜり。」とあり、詩の分類用語としても使われている。なお、「閑」については本『研究報告』第三十九号参照¹⁶⁾。また、「適」については本『研究報告』第三十七号参照¹⁷⁾。○薄言：『詩経』に頻出する。「いささかここに」等と訓ずる。「薄」はしばらく、少しばかり。「言」は助詞。後世にも王粲の「土孫文始に贈る」(『文選』卷二十二)に「悠悠たる我が心、薄か言に之れを慕う。」など用例がある。○養：嵇康に「養生論」がある(『文選』卷五十三)。孟浩然の「告八の従軍するを送る」に「運籌して幕に入らんとするも、拙を養いて間居に就く。」とある。同じく、「晩春に遠上人の南亭に題す」に「給園に支遁隠れ、虚寂にして身和を養う。」とある。また、盧照鄰の「三月曲水の宴にて尊字を得たり」に「美光の時彦有り、徳を養いて山樊に坐す。」とある。また、王昌齡の「趙十四兄訪ぜらる」に「客来りて長簾を舒べ、閑を開きて清風を延く。但だ無絃琴有るのみ、君と共に尊中を尽す。晚来常に易を読み、頃者嵩に還らんと欲す。世事何ぞ道うを須いん、黄精且つ蒙を養う。嵇康は殊に識寡く、張翰は独り終るを知る。忽ち鱸魚の膾を憶い、扁舟江東に往く。」とある。また、王維の「河南の嚴尹弟弊廬に宿せられ別人を訪う、十韻を賦す」に「上客は能く道を論じ、吾生は蒙を

養うを学ぶ。」とある。また、李白「張相鎬に贈る二首」其の一に「澹然として浩氣を養い、欬ち起ちて大釣を持す。」とある。同じく、「北山に独酌して韋六に寄す」に「川光は昼に昏凝し、林気は夕べに凄緊す。焉に於て朱果を摘み、兼ねて玄牝を養うを得たり。月に坐して宝書を觀、霜を払いて瑶軫を弄ぶ。」とある。「玄牝」は『老子』第六章に出る語。同じく、「李青の南葉の楊川に歸るを送る」に「心を化して精魄を養い、几に隠りて天真を宥にす。」とある。「几に隠りて」は『莊子』齊物論篇、「宥」は逍遙遊篇に出る。同じく、「魯城の北に范居士を尋ねて道を失し、蒼耳の中に落ちて范の置酒して蒼耳を摘むを見て作る」に「忽ち憶う范野の人、間園に幽姿を養うを。」とある。同じく、「古風」其の六に「情性は習う所有り、土風は固より其れ然り。」とある。また、韋応物の「洛陽の丞に任じて請告す一首」に「方鑿は円を受けず、直木は輪と為らず。材を揆れば各おの用有り、性に反すれば苦辛を生ず。腰を折るは吾が事に非ず、水を飲むは吾が貧に非ず。休告して空館に臥し、病を養いて鬻塵を絶つ。遊魚は自ら族を成し、野鳥も亦た群有り。家園は杜陵の下、千歳心は氛氳たり。」とある。同じく、「菓を種う」に「好みて神農の書を読み、多く菓草の名を識る。：州民自ら訟寡し、閒を養うは政成るに非ず。」とある。同じく、「閒居友に贈る」に「閒居して病瘵を養い、素を守りて葵菹を甘しとす。」とある。同じく、「暢校書当に答う」に「偶然として官を棄てて去り、跡を投じて田中に在り。日出て茅屋を照らし、園林に愚蒙を養う。」とある。同じく、「郡中の西齋」に「塵境と絶えたるに似たり、蕭條たり齋舎の秋。寒花独り雨を経、山禽時に州に到る。清觴に真氣を養い、生書に道流を示す。豈に符守を將て恋せんや、幸に已に棲心幽なり。」とある。また、白居易の「新昌の新居に事を書す四十韻、因りて元郎中張博士に寄す」に「爐香は蓋を穿ちて散じ、籠燭は紗を隔てて然く。陳室は何ぞ曾て掃わん、陶琴は弦を要せず。屏除して俗事尽き、養治して道情全し。」とある。同じく「蒼華を祝うに和す」に「稟質は本と羸劣にして、生を養うこと仍お莽鹵なり。」とある。同じく「非を知るに和す」に「儒教は礼法を重んじ、道家は神氣を養う。礼を重んずれば滋彰するに足り、神を養えば避忌する

こと多し。如かず禪定を学ばんには、中に甚深の味有り。曠郭として了に空の如く、澄凝するは睡るに勝れり。」とある。同じく「陝州の王司馬建の任に赴くを送る」に「陝州の司馬去ること何如、静を養い貧を資けて両つながら余有り。」とある。同じく「老と与に期するを為さず」に「目を閉じて常に閑坐し、頭を低れて毎に静かに思う。神を存して機慮息み、気を養いて語言遅し。」とある。同じく「夏日作」に「外に養いて物は費えず、内に帰して心は煩わしからず。費えざれば用は尽し難く、煩わしからざれば神は安んじ易し。庶幾くは天閑する無く、以て天年を終うるを得ん。」とある。同じく「病中宴坐」に「竟日惰として無事、居る所閑にして且つ深し。外は支離の体を安んじ、中に希夷の心を養う。」とある。同じく「郭質張十五仲元、時に校書郎為り」に「帝都は名利の場、鶏鳴きて居を安んずる無し。独り懶慢の者有り、日高くして頭未だ梳くしけずらず。工拙は性同じからず、進退は跡遂に殊なり。幸いに太平の代に逢い、天子は文儒を好む。小才にして大いに用いられ難く、典校して祕書に在り。三句に両たび省に入り、因りて頑疏を養うを得たり。」とある。同じく「照国の閑居」に「貧閑にして日高くして起き、門巷は昼に寂寂たり。……平生尚お恬曠たり、老大なれば宜しく安適すべし。何を以てか吾が真を養う、官は閑にして居処は僻なり。」とある。同じく「達理二首」其の二に「時来りては返むべからず、命去りては焉いずんぞ能く取らん。唯だ当に浩然を養うべし、吾は達人の語を聞けり。」とある。「浩然を養う」は『孟子』公孫丑篇上に「浩然の気を養う」とあるのをふまえる。同じく「陶潜の体に效なまうの詩十六首」其の十二に「五柳の下に帰来して、還て酒を以て真を養う。人間榮と利と、擺い落すこと泥塵の如し。」とある。「五柳」「帰来」は陶淵明の作品名「帰去来の辞」「五柳先生伝」をふまえる。同じく「琴を聴くを好む」に「清暢にして疾を銷すに堪えたり、恬和にして蒙を養うに好し。」とある。同じく「再び賓客分司を授けらる」に「既に閑に資りて疾を養い、亦た慵に頼りて拙を蔵す。賓友は従容たることを得、琴觴して怡悦を恣にす。」とある。同じく「素屏の謡」に「吾れ香爐峯の下に於て草堂を置けり、二屏倚せて東西の牆に在り。夜は明月の我が室に入るが如く、暁は白雲

の我が牀を圍るが如し。我が心久しく浩然の気を養い、亦た爾と表裏して相い輝光せんと欲す。」とある。同じく「仲夏齋戒の月」に「巾を脱し且つ修養し、聊か以て天年を終えん。」とある。同じく「晚秋閑居」に「地は僻にして門深く送迎少し、衣を披き閑坐して幽情を養う。秋庭は掃わず藤杖を携え、閑に梧桐の黄葉を踏みて行く。」とある。同じく「酬皇甫賓客」に「玄晏の家風黄綺の身、深居高臥して精神を養う。性慵にして病無きも常に病と称し、心足りて貧しと雖も貧を道みちわず。」とある。同じく「王山人に贈る」に「王芝觀裏の王居士、気を服し霞を餐じて善く身を養う。」とある。なお、本『研究報告』第三十八号参照(1)。
○性情：もつて生まれた性質・本性。『周易』乾卦・文言伝に「利貞とは性情なり。」とある。和刻本『二程全集』卷之四・遺書・四bに「舞踏に本長袖もとを要するは、以て其の性情を舒せんと欲するなり。」、同じく卷之四・十bに「礼樂は只だ進反の間に在りて便ち性情の正を得。」、同じく卷之十二・十五aに「性情は猶お實質体段と言うがごとし。」、同じく卷之十九・十五b・十六aに「問う、『物を観て己れを察するは、還つて物を見るに因りて諸を身に反求するや否や。』と。曰く、『必ずしも此の如く説かず。物我一理、纒むかに彼を明らかすれば即ち此を眺る。内外を合するの道なり。其の大を語れば天地の高厚に至り、其の小を語れば一物の然る所以に至る。学者皆な当に理解すべし。』と。又た問う、『致知は先ず之を四端に求めば如何。』と。曰く、『之を性情に求むれば固に是れ身に切なり。然れども一草一木、皆な理有り、須く是れ察すべし。』と。同じく卷之十九・二十六aに「古人は歌詠以て其の性情を養い、声音以て其の耳を養い、舞踏以て其の血脈を養うこと有り。今は皆な之れ無し。是れ樂に成ることを得ざるなり。」、同じく卷之二十四・十五aに「……又た曰く、『天と上帝との説は如何。』と。曰く、『形体を以て之れを言えば之れを天と謂い、主宰を以て之れを言えば之れを帝と謂い、功用を以て之れを言えば之れを鬼神と言い、妙用を以て之れを謂えば之れを神と謂い、性情を以て之れを言えば之れを乾と謂う。』と。』とある。宋学では思想的に「性」と「情」に分け、「性」を重んずる。性は「理」であることとされる。唐詩の用例では、王勃の

「倅たる彼我の系」の序に「故に其の情性に本づき、其の本業を原ぬ。」とある。また、孟浩然の「冬至の後呉張二子の檀溪の別業に過る」に「卜築は自然に因り、檀溪は更には穿たず。園廬に二友接わり、水竹に数家連なる。直に南山と対するのみ、地の偏なるを選ぶに関わるに非ず。草堂に時に曝し、蘭柵に日に周旋す。外事は情都て遠く、中流は性の便なる所なり。閒に太公の釣を垂れ、興に子猶の船を発す。予も亦た幽棲の者、経過竊かに慕うなり。」とある。また、韋応物の「重陽に答う」に「山を望み亦た水を臨む、暇日毎に來り同ず。性情は一に疎散たり、園林に清風多し。」とある。同じく、「園林に晏起して照応・韓明府・廬主簿に寄す」に「田家已に耕作し、井屋に晨煙起つ。園林に好鳥鳴き、閒居して猶お独り眠る。覺えず朝已に晏なるを、起來して青天を望む。四体一に舒散たり、情性も亦た忻然たり。還た復た茅簷の下、酒に對して數賢を思ふ。」とある。同じく、「吳舍人の早春に西亭に歸沐し志を言うに和す」に「亭は高くして性情曠く、職は密にして交遊稀なり。詩を賦して無事を樂しみ、帯を解きて南扉に偃す。」とある。同じく、「義演法師の西齋」に「茅を結びて絶岸に臨み、水を隔てて清磬を聞く。山水は曠として蕭條たり、登臨して情性を散ず。」とある。また、白居易の「春中廬四周諒と華陽觀に同居す」に「性情は懶慢にして好く相い親しみ、門巷は蕭條として隣りと作るに稱う。」とある。同じく「夏日に独り直して蕭侍御に寄す」に「夏日に独り直に上り、日長くして何の爲す所ぞ。澹然として他の念無く、虚静なるは是れ吾が師なり。形は有事に委ねて牽かれ、心は無事と期す。仲臆は一以て曠く、外累は都て遺るるが若し。地は貴くして身は覺えず、意は閒にして境來り隨う。但だ松と竹とに對し、山中に在る時の如し。情性聊か自ら適し、吟詠して偶たま詩を成す。」とある。同じく「鏡に對して吟ず」に「閒に明鏡を看て清晨に坐す、多病の姿容は半ば老身たり。誰れか論ぜん情性の時事に乖くを、自ら想う形骸の貴人に非ざるを。」とある。同じく「詩解」に「新篇日月に成るも、是れ声名を愛せず。旧句時時に改むるも、性情を悦ばしむるに妨ぐる無し。」とある。同じく「食飽く」に「食飽き枕を払いて臥し、睡り足りて起ちて閒吟す。浅酌す一杯の酒、緩弾す數弄の琴。

既に情性を暢ぶべく、亦た光陰を傲るに足れり。誰か知る利名尽き、復た長安の心無きを。」とある。同じく「酒に對し閒吟して同老の者に贈る」に「人生七十稀なり、我年幸いに之に過ぐ。……百事尽く除き去りて、尚お酒と詩とを余す。興來りて一篇を吟じ、吟じ罷りて酒は一卮。独り情性に適うのみならず、兼ねて用つて衰羸を扶く。」とある。

○漏移：漏は水時計。それで計つた時刻。 ○灯影：沈佺期の「夜遊」

に「月華は昼色に連なり、灯影は星光に雜う。」とある。また、白居易の「夢に李七庚三十三と同じく元九を訪う」に「残灯影は牆に閃き、斜月光は牖を穿つ。」とある。同じく「上陽の白髮人 怨曠を慙むなり」に「耿耿たる残灯の壁に背くの影、蕭蕭たる暗雨の窓を打つ声。」とある。同じく「夢得の秋夕寐られずというを寄せらるるに酬ゆ」に「露竹は灯影を偷み、煙松は月明を護る。」とある。 ○衣冷：白居易の

「晩秋の夜」に「碧空溶々として月華静かなり、月裏に愁人は孤影を弔う。……情を凝め語らずして思ふ所を空くす、風は白露を吹きて衣裳冷かなり。」とある。 ○雨声：江総の「秋日に昆明池に遊ぶ」に「靈沼は蕭條として生まれ、遊人に意緒多し。終南に雲影落ち、渭北に雨声過ぐ。」とある。白居易の「百花亭にて晩に望みて夜歸る」に「日色は悠揚として山に映じて尽き、雨声は蕭颯として江を渡りて來たる。」とある。同じく「孤山寺にて雨に遇う」に「波を払い雲色重く、葉に灑ぎて雨声繁し。」とある。同じく「秋雨の夜眠る」に「臥すること遅く灯滅えて後、睡ること美し雨声の中。」とある。 ○南窓：陶淵明の

「五月の旦に作りて戴主簿に和す」に「南窓に悴物罕に、北林は榮え且つ豊かなり。」とある。同じく「歸去來の辞」(『文選』卷四十五)に「南窓に倚りて以て寄傲し、膝を容るるの易安なるを審かにす。」とある。また、張九齡「許給事の中直夜に諸公に簡するに和す」に「左掖に天近きを知り、南窓に月臨むを見る。」とある。また、盧照鄰の「王暉の秋夜思う所有りに和す」に「寂々たり南軒の夜、悠然として知る所を懷う。」とある。また、白居易の「村雪夜坐す」に「南窓に灯に背きて坐す、風霰暗くして紛紛たり。」とある。同じく「病中に友人相い訪う」に「臥すること久くして日を記せず、南窓昏れて復た昏る。」とある。同じく

「秋月」に「夜初めには色は蒼然たり、夜深くして光りは浩然たり。稍や西廊の下を転りて、漸く南窓の前に満つ。」とある。○高眠：枕を高くして眠る。こころよく眠る。ゆつくり眠る。つまりは世俗にとどまらず閑居して志操を高く持していること。高臥。廬照鄰の「三位休日の田家」に「南澗に泉初めて冽にして、東籬に菊正に芳し。還た思う北窗の下、高臥して羲皇に偃せんことを。」とある。「東籬に菊正に芳し」は陶淵明「飲酒」其の五の「菊を采る東籬の下、悠然として南山を見る。」をふまえる。また、張説の「崔公に贈る」に「我れ聞く西漢の日、四老南山に幽なり。長歌すれば紫芝秀で、高臥すれば白雲浮かぶ。」とある。また、孟浩然の「京より還りて王維に贈る」に「衣を払いて何処にか去る、高枕す南山の南。」とある。また、王維の「故人張諲詩を工にし易トを善くし兼ねて能く丹青草隸す、頃詩を以て贈らる、聊か之れに酬ゆるを獲たり」に「故園枕を高くして三春を度り、永日帷を垂れて四隣を絶つ。」とある。同じく、「酒を酌みて裴迪に与う」に「世事浮雲何ぞ問うに足らん、如かず高臥して且つ餐を加えんには。」とある。また、李白の「元丹丘の山居に題す」に「故人東山に棲み、自ら愛す丘壑の美。青春は空林に臥し、白日猶お起きず。松風は襟袖に清く、石潭は心耳を洗う。羨む君に紛喧無く、碧霞の裏に高枕するを。」とある。また、耿湋の「春日苗筵竹亭に題す」に「閑詠すれば疏篁近く、高眠すれば遠岫微かなり。」とある。また、鄭谷の「蒲澗の長老に贈る」に「林間に塾坐すれば時に虎有り、粥後に高眠すれば鷓鴣を聞かず。」とある。また、劉長卿の「薛抛宰涉県に送る」に「昔聞く河上に在り、高臥して自ら無事なりと。」とある。また、白居易の「鄂公伝を読む」に「深居に高臥して人を見ず、功名は斗藪して灰塵に似たり。」とある。同じく「池上聞吟二首」其の一に「高臥閑行す自在の身、池辺に六たび見る柳修の新たなるを。」とある。同じく「皇甫の賓客に酬ゆ」に「玄晏の家風黄綺の身、深居高臥して精神を養う。」とある。同じく「中隱」に「君若し高臥せんと欲せば、但だ自ら深く関を掩え。亦た車馬の客、造次に門前に到る無し。・・・人生れて一世に処る、其の道兩つながら全きこと難し。賤しければ即ち凍餒に苦み、貴ければ則憂患多し。唯だ此の中隱の

士のみ、身を致すこと吉にして且つ安し。窮道と豊約と、正に四者の間に在り。」とある。○夢不驚：孟浩然の「張丞相に陪して松滋江自り東して渚宮に泊る」に「臘響は雲夢を驚かし、漁歌は楚辞を激しくす。」とある。また、韋応物の「聽鶯の曲」に「誰が家の懶婦残夢を驚かず、何れの処の愁人故園を憶う。」とある。また、白居易の「夢に因りて悟る有り」に「初めて韋尚書を見るに、金紫何ぞ輝々たる。中ごろ李侍郎に遇う、笑言甚だ怡怡たり。終りに崔常侍為り、意色苦だ依依たり。一夕に三たび改変するも、夢心は驚疑せず。此の事は人尽く怪む、此の理誰か知るを得ん。我れ粗ば此の理を知る、笠乾師に聞けり。」とある。同じく「長恨歌」に「九華張裏夢魂驚き、衣を攪り枕を推して起ちて徘徊す。」とある。

注

- (1) 都城市立妻ヶ丘中学校国語科教諭
- (2) 鹿児島高等学校国語科教諭
- (3) 岡田武彦他編集『楠本端山碩水全集 全一卷』(葦書房、一九八〇)
- (4) 『松浦友久著作選Ⅱ 陶淵明・白居易論 抒情と説理』(研文出版、二〇〇四) 一六九頁
- (5) 『松浦友久著作選Ⅱ 陶淵明・白居易論 抒情と説理』(研文出版、二〇〇四) 一七〇頁、なお、同二五一頁、二八一頁、二八二頁等も参照されたい。
- (6) 本『研究報告』第三十六号(二〇〇二) 三六頁
- (7) 『古典世界文学』29 禅家語録Ⅰ(筑摩書房、一九七六) 二八四頁
- (8) 入谷義高『臨濟録』(岩波文庫、一九八九) 三十四頁
- (9) 同『臨濟録』(岩波文庫、一九八九) 四十六頁
- (10) 同『臨濟録』(岩波文庫、一九八九) 五十頁、五十一頁

- (11) 同『臨濟録』(岩波文庫、一九八九)五十六頁
- (12) 『講座佛教Ⅳ 中国の佛教』(大藏出版株式会社、一九七八)一四頁、一一五頁
- (13) 『人類の知的遺産5 老子・荘子』(講談社、一九七八)三五八頁〜三七三頁
- (14) 『人と思想 白居易』(清水書院、一九九七)一三二頁以降
- (15) 本『研究報告』第三十九号(二〇〇五)四十四頁
- (16) 本『研究報告』第三十七号(二〇〇三)三十六頁
- (17) 本『研究報告』第三十八号(二〇〇四)五十五頁、五十六頁

(平成十八年十月二日受理)